新聞　10.09.10 中日　(第3種郵便物認可)

浸水風化 一番怖い

泥水を乗り越えて
東海豪雨10年

1

自宅の二階から川を見るだけで吐き気を催すようになった。ゆったり流れる、穏やかな川面であっても。「とにかく川の見えない所へ」。二〇〇〇年九月十二日の東海豪雨の体験が、名古屋市北区の元保健師、神谷栄子さん(五七)の心を傷つけていた。

午前一時。庄内川から新川(新地蔵川)に押し寄せる濁流の「ゴォー」というなりが、たたきつける雨の音すらかき消し、暗闇に響いていた。新川をあふれた水が、堤防の隣にあった自宅に流れ込む。

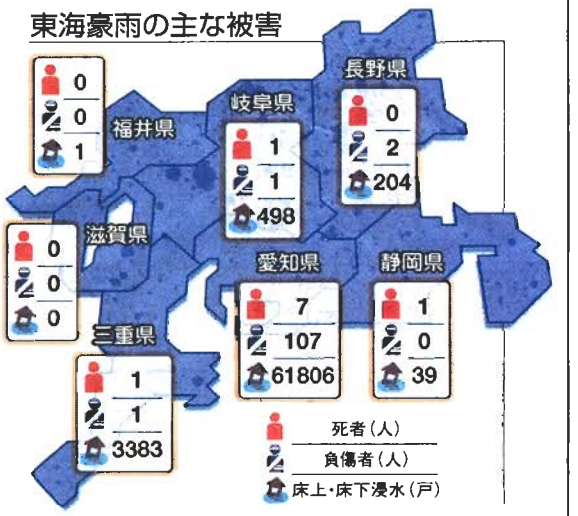
二階に家財道具を上げている一階にたたないうちに、一・二㍍東の浸水しなかった土地に移った。ほかの住民も次々に引っ越していった。並びの九軒で、今も同じ人が住み続けているのは一軒だけだ。

それでも、人が去った土地にはまた別の人が住み着いた。業者が住宅を建て、豪雨を知らない人が土地を求めた。いま、豪雨などなかったかのように新しい家が立ち並んでいる。神谷さんが「また被害に遭う」と忠告しても、越してきた人は「豪雨が来てみにゃあ分からん」と素っ気なかった。

千世帯余が浸水した天白区野並地区。ことし八月初め、被災三百世帯が減り、六百世帯増えて五千百世帯に。町内会長の大井義男さん(七二)は「買い物や学校に行くのに便利のいいところだから、水害のことを知らずに移ってくる人も多いのだろう」とみている。

愛知県が七月に行った意識調査で、水害の情報が「ほしい」との回答は九割あった。ところが、自分の住んでいる市町村に洪水が起きたときの浸水の深さを示す「洪水ハザードマップ」の存在を「知っている」と答えたのは55%。六月に配られたばかりの名古屋市内ですら、首のあたりまで水位が迫ってきた。夫を残し、年老いた両親、十八歳の長女とともに堤防を駆け上がり、避難所へ向かった。どこが地面で、どこが川か分からない。激しく水流が打ち付け、いつ崩れるとも知れない堤防。「ここで死ぬのか」と体が震えた。

泥水が庄内川(手前)から洗堰(あらいぜき)を越えて新川に流入。さらに新川の堤防を越えて街に押し寄せた＝名古屋市内で、2000年9月12日、本社ヘリ「おおづる」から



東海豪雨　2000年9月11～12日に台風14号と秋雨前線の影響で、東海地方に大きな被害を与えた。名古屋の11日の降雨量が、1日の降水量としては観測史上最高の428㍉を記録。1時間当たりの降水量は愛知県東海市で114㍉、名古屋でも97㍉を観測した。

名古屋市西区の新川堤防が決壊し、庄内川や天白川支流から水があふれた。岐阜県恵那市では土砂崩れが相次いだ。死者は愛知、岐阜などで10人、負傷者は111人。両県を結ぶ国道22号が通行不能になったほか、東海道新幹線が全線開通するまで丸1日かかった。

×　×　×

死者十人、六万五千余の浸水家屋を出した東海豪雨から十一日で十年を迎える。被災者の人生を狂わせ、行政に一層の水害対策を迫った。近年、ゲリラ豪雨と呼ばれる局地的大雨が増加。いま、水害とどう向き合えばいいのか、東海豪雨を教訓に考える。

「被災者にとっては、『もう』じゃなく『まだ』十年なんです」。神谷さんは今年、当時の体験と行政への要望を原稿用紙五十枚につづった。肺がんを患い、余命が長くないと感じている。手記は「遺書」として九日、県河川課に渡した。市や国土交通省にも手渡すつもりだ。

「だれにもあのような恐怖を体験させたくない。風化してしまうのが一番怖い」

泥水を乗り越えて
東海豪雨10年
2

情報周知 孤立防げ

「雨がやんだのに、なぜ」。自宅前の道路の水かさがみるみるうちに増していく。東海豪雨が明けた九月十二日午前八時前。愛知県新川町（現清須市）の佐藤善宣さん（六八）はいぶかった。

数時間前、二・五キロ北東の名古屋市西区で新川が決壊。未明まで別の場所で土のうを積んで、仮眠を取っていたため気付かなかった。二、三十分後、「避難してください」と、屋外のスピーカーから放送が流れた。すでに畳まで水に浸っていた。「今ごろ何だ、と怒れてきた」

家の奥からボコン、バチャーンという音が聞こえてくる。冷蔵庫や食器棚が水に浮き、ひっくり返っていた。位牌と靴を二階に上げた。水が引く翌日夕まで二階で過ごした。

東海豪雨では、二階に孤立する人たちの姿が目立った。新川町がスピーカーで避難勧告を流したのは深夜の一回。広報車を走らせたが、冠水した道路を回るのには限界があった。堤防決壊も朝になって初めて伝えた。

同町では、住民の半数以上の一万人超の自宅が浸水し、百五十人の町職員が対応した。「被害に驚き、ばたばたするばかりだった」と当時の職員。消防団への出動要請や情報収集に飛び回り、消防車のある地下入り口に土のうを積んだ。

電話は鳴りやまず、各地に派遣した職員や地区役員からの報告や連絡が続く。住民からの苦情もあった。当時

豪雨による土砂崩れで民家が倒壊した現場。近くの住民たちは「避難勧告を聞いていない」と語った＝7月16日午前、岐阜県八百津町で、本社ヘリ「まなづる」から

町助役だった加藤静治氏（六八）は「混乱し、十分な情報提供まで手が回らなかった」と認める。

東海豪雨は住民に情報を伝える大切さを浮き彫りにした。これを教訓に、より早く危険を知らせる「避難準備情報」の導入が各市町村に広まった。東海地方のほぼすべての市町村が、防災用スピーカーを備えるようになり、防災ラジオなどを住民に配布、販売するところもある。

ただ、情報が住民に届かないケースが依然ある。ことし七月、豪雨による土砂崩れで三人が死亡した岐阜県八百津町には、全戸に防災無線の受信機があったが、町が流した避難勧告などを、住民たちは「聞いていない」と一様に首をかしげた。

土砂崩れの現場近くの男性（七三）は「雨と雷の音がすごくて、気付かなかった」。町の担当者は「繰り返し放送し、広報車で回るべきだったかもしれない」と課題として挙げた。

現在、清須市長を務める加藤氏は「東海豪雨後、情報を出す基準を設け、自主防災会への周知も徹底している。もう二度と孤立する被災者を出してはいけない」と力を込めた。

泥水を乗り越えて
東海豪雨10年
―3―

対策強化 不安なお

名古屋市南区笠寺地区の地下十数㍍。頭上の東海道線や国道の騒音から隔絶された空間がある。トンネルがいくつものカーブを描いて延々と続いている。

工事用の電灯がほのかに照らし出す。直径三㍍、長さ一㌔。円形の機械が鉄製の骨組みにコンクリートを吹き付けていく。

トンネルは「貯留管」と呼ばれ、大雨の襲来時に雨水が流れ込む。一般的な二十五㍍プールなら二十五杯分の容量。「東海豪雨並みの雨が一時間降っても、周囲の被害を床下浸水だけで食い止められるだろう」。市下水道計画課の河合克敏主査は胸を張った。

市はこの十年、各地で貯留管の設置や排水ポンプ場の増強に努めてきた。かつて一時間五〇㍉の雨しか対応できなかったが、十年に一度とされる六〇㍉まで持ちこたえられる。

だが東海豪雨で名古屋を襲ったのは、一時間九七㍉という滝のような雨。六〇㍉に対応できるようになっても計算。大雨がやまなければ、街の水位はどんどん上がっていく。

「また水があふれなければいいが…」。雨音が激しくなるたびに、名古屋市天白区の野並地区に住む池上禎彦さん（六八）は空模様をうかがう。

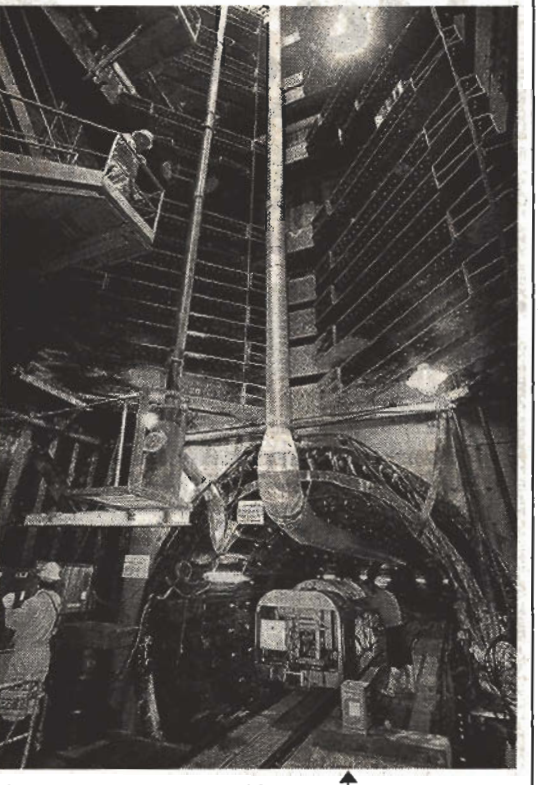
東海豪雨では、低い土地にある野並に周囲からの水が集中。池上さんの自宅も床上十㌢ほどが浸水し、愛車も使いものにならなくなった。

「水害に弱い地域なのに行政は対策を打ってこなかった」と住民は怒りの声を上げた。七百八人の被災者は市を相手に訴訟を起こし、池上さんは原告団長となった。水害対策に万全を期すことも問うていた。

「一〇〇㍉まで対応できればいいのだが、現実的ではない」と市の担当者たち。二〇一八年度までに二千億円を投じるが、これ以上の支出は難しいと口をそろえる。

財政上のハードルに加え、河川の容量の問題がある。排水ポンプから水を送り続ければ、堤防が決壊する恐れが生じるからだ。国や愛知県は庄内川や新川、天白川に豪雨後の五年間で一千億円をかけて川底を掘り、堤防を強化してきた。だが「用地買収も困難で、ハード面の整備には限界がある」と県河川課の担当者は打ち明ける。

司法は「未曾有の豪雨で、被害を予測できなかった」と池上さんらの訴えを退けた。だが、急激な気象変動で「未曾有の豪雨」が頻発している。池上さんは「また東海豪雨級の大雨が来ないとも限らない。今のままでは不安は消えない」。



作業用の縦穴から横にトンネルが延びる。工事が進められている貯留管＝名古屋市南区で

泥水を乗り越えて
東海豪雨10年
4

弱者安全網 進まず

床まで迫る水位。停電でエレベーターが動かず、車いすで二階には上がれない。「このままでは危ない」。九月十二日午後三時ごろ、山田昭義さん（六八）は、愛知県新川町（現清須市）の自宅から町役場に電話で助けを求めた。「まだか」。車いすが水に漬かり始め、焦りが募ってきた。一時間後、町職員が一人だけ来た。

山田さんは、福祉ホームや障害者就労支援施設などを運営する「ＡＪＵ自立の家」（名古屋市昭和区）の専務理事。同時に電話をかけたＡＪＵから職員四人が来なければ、避難できなかった。水が引いて自宅に戻ると、床上五十㌢まで浸水した跡があった。

町には災害に備え福祉救援マニュアルがあり、社会福祉協議会の職員がすぐ助けに来るはずだったが、他の作業に追われ、電話すら近く。「公的援助で避難した」のは一人だけだった。

多くの市町村は東海豪雨後、障害者や高齢者ら災害弱者を一つにまとめた名簿を作った。災害時に、これを基に安否を確かめることになっている。だが、名古屋市の職員は「避難所の運営など他の業務もあり、安否確認は状況が落ち着いてからしかできない」ともらす。

ＡＪＵの調査では、避難した障害者の多くは知人の助けを得ていたことが分かった。「行政ではなく、顔見知りの関係こそ災害時に頼りになる」。近くの住民を巻き込んで防災訓練を始めた。名古屋市も二〇〇七年から、各地域に災害弱者一人一人の支援者や避難方法といった支援計画を立てるよう働きかけている。

だが、「計画が完成している町内会はまだ数％では」と担当者。リーダーに意識の差があり、地域の結びつきの強さにも左右されるからだという。家族構成や年齢、障害を知られたくない人も多い。清須市も状況は同じ。災害弱者の名簿に二千人が登録されているが、市が支援計画まで把握できているのは一人だけだ。

災害弱者を守る安全網づくりは十年を経てもなお進んでいない。

東海豪雨で浸水被害に遭った障害者の自宅で、泥水を洗い流すボランティアたち＝2000年9月15日、名古屋市西区中小田井で

ていたことを差し引いても「行政の『弱者対策』は机上の空論だった」。

ＡＪＵは豪雨後、名古屋市西区を中心に障害者四十三人に聞き取り調査をした。「避難できず自宅にとどまっ

泥水を乗り越えて
東海豪雨10年
5

若者離れ 水防に影

「若い人が減っていやマンホールに足を取る。この十年で、水防られる団員もいた。団が十歳年を取った」。ある平屋の家では、東海豪雨で甚大な被害水に漬かったテーブルが出た愛知県清須市の水防団長、斎藤雅美さぼう然と座っていた。ん(五九)は、年齢の上昇「もう少し遅ければ命を心配する。にかかわっていたかも

豪雨当時は旧新川町の副団長だった。豪雨が去った直後、団員たちは自宅に取り残された人たちの救出に当たった。胸まで水に漬かりながらボートを押し一軒一軒声をかけていく。ふたが外れた側溝に運んだ。

しれない」。二日間で二百三十六人を避難所

災害に備え、救助訓練する団員たち
＝愛知県清須市の新川グランドで

現在、団員二百八十人のうち四十代以上が七割近くを占め、二十代は十六人だけだ。全国の水防団員数はこの十年で七万六千人減り、八十九万七千人になった。斎藤さんは「若い人は先輩との付き合いや訓練を敬遠するようだ。勧誘しても反応は薄い」と苦い表情を浮かべた。

東海豪雨では、水防団は救出だけでなく、ポンプ排水や広報車での巡回にもあたった。あふれた水に土のう積みが追いつかず、堤防から避難したこともあった。「水防活動では経験がものをいう」と考えているだけに、若い人たちの水防団離れは気にかかる。

人が減っているのは、行革を進める自治体も同じ。西枇杷島町や新川町など四町が合併してできた清須市の職員は、旧四町の計五百六人から四百七十二人になった。市幹部は「市内各地で同時に災害が起これば、この人数の差は大きい。対応に困る可能性が出てくる」と心配する。

人員態勢に不安が残る一方で、突発的な豪雨が頻発するようになった。気象学などが専門の大和田道雄・愛知教育大名誉教授(六七)は「温暖化などで、本州は亜熱帯気候になったといえる。熱帯のスコールのように一時間一〇〇㍉の雨が日本で毎年降ってもおかしくない」と警鐘を鳴らす。

拡大する豪雨の危険を、農地や山林の市街化が増幅させている。雨水を地中に浸透させてため込む力が落ちているからだ。県河川課の担当者は「急激な市街化に、水路や河川整備が追いつかない」と頭を悩ませる。

斎藤さんは東海豪雨の経験から行政や水防団の限界を知るだけに住民同士が助け合う「共助」を口にする。「命は自分で守るという取り組みが求められている」＝終わり

(社会部・安田功、日下部弘太、稲沢通信部・荒井隆宏)